HALT

ＳＴＡＲ★ジョーカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＨＡＬＴ

【Ｎコード】
Ｎ３８２４Ｃ

【作者名】
ＳＴＡＲ★ジョーカー

【あらすじ】
失われた過去の記憶をたどって隕鉄剣を手にした少年は、圧政に抗して立ち上がるその果てに見たものは？

ー伝説の隕鉄ー

ー1ー

その地方は疲弊していた

王国の一地方にすぎないハルト地方は、中央政府よりはるか離れた
山間部に位置していた

産業といえば、農業それも放牧を主体としたささやかなものだった

若者は中央政府のあるメギドに出て行き、散在する村々には女子供
と老人が

人口のほとんどを占めている

なかでももっとも古い村のひとつであるハルト村はその昔

この地方を治める名家の村であったが

現在の王家との戦いに破れ、いっさいの特権を剥奪され、農民に身
をおとしたのだ

たくさんの縁者が処刑され、今はその名前が残るのみである

そのハルト村に数年前ひとりの男の子が誕生した

なんの変哲もないふつうの男の子であったが、ただひとつだけ変わ
ったことがあった

その子の名は「ハルト」と名付けられた

その地方の名前をとって・・・

そう・・ハルトのハルトのハルトの誕生である

―2―

ハルトは12歳になっていた
いつものように、家畜の群れをつれてハルト地方特有の高原へと向かった
この地方の子供はよく働く、というよりも子供も働かなければ暮らしていけないほど
疲弊しているのだ
中央の王族が支配するメギド地方は豊かな穀倉地帯であり、商業、工業もさかんで
科学技術も発達しており、最近ではこの惑星の外周に衛星植民地をもつほどの
豊かさであった
宇宙を人が行き来するこの時代に、まるでタイムカプセルのように時代おくれの
この地方は目を疑うほどであったが、それには何世紀にもわたって変わらない迫害の歴史があったのだ
それほどまでに、王族はなぜハルトの人々を忌み嫌うのか

いや王族だけではない、この惑星の住民のほとんどが決まって言う
「ハルトだからしかたがないよ」
それには深く長い歴史をひもとかなければならない
いつもの放牧地に着くとハルトはいつものように草笛を吹き始めた
高原の風は初夏の訪れを告げ
ほおにあたる空気はここちよく、この地方がそんな場所であるとは
微塵もかんじさせない
おだやかな朝をである
高原のあちらこちらには、朽ち果てた石造りのおそらくは建物であ
ったろう古代の遺跡が
散在していた
この地方の住人のだれもがその由来を知る者もなく
はるか昔には独自の文化と文字を持っていたという伝聞がまことしや
かに
ささやかれていたが、今では誰も知るものもなく風景のなかに埋没
していた
ふと遺跡の陰から何か動くものが出てきた

ハルトはそれを見つけると、口にしていた草笛を

「フッ」

と風に飛ばしておもむろに右手を挙げて、おおきく振り始めた

「ピオじいさん、おはよう」

見ると左右の腰に大きな袋を下げた、見るからに貧しそうな老人が

少し足をひきずりながら杖をたよりに近づいてくる

その顔は齢７０は過ぎたかと思われるが、肉厚の血色いい顔をしている

片手を大きく振りながら、満面に笑みをたたえて近づいてくる

やはり笑顔で迎えるハルトの大きく振られた右腕には

青い大きな入れ墨がある

老人はハルトの前まで来ると、右腕を指さし

「だいぶ目立ってきたなあ、お前の入れ墨も・・・まあそれだけ大きくなったというわけだ」

そう言うと老人はその長い口ひげを大きく風になびかせて、笑った

「そうかな気にしたことはないけれど、そう言われれば・・・」

ハルトは自分の腕と老人の顔を交互に見比べて、不思議そうな顔をした

「生まれた赤ん坊に入れ墨をするとは、いくらなんでもな」

そう言うと老人は急に目をそらして遠くの平原に顔を向けた

なだらかな平原の向こうには、幾重にも山並みがつらなり

遙か向こうにあるであろうメギドの広野は見えるべくもない

ハルトはこの地方に生まれた男子は、みな産まれた時に入れ墨をされること

そのときメギドの監察官と呼ばれる男達が来て、それを行うこと

そしてそれは古くからの習慣で、誰も不思議に思わないあたりまえの事であると理解していた

老人の言い方が少し奇異に感じたハルトは、最近気が付いたあることを質問してみた

「おじいさん、なぜ街の男の人は入れ墨をしていないの？」

老人は急にハルトの方を向き直ると、不思議そうにしているそのあどけない顔を見つめた

―3―

「おまえ、街に行ったのか？」

老人はいぶかしそうな顔をして聞いた

「ああ、この前とうさんと市場に行ったよ、街ってすごいんだねここらと全然違うね」

「ラウルの奴め、外の世界を見せるには早すぎると言ったのに」

「とうさんは悪くないよ、僕がせがんだんだ。レネの誕生日の贈り物をどうしても自分で
選びたくて・・・」

「そうか・・レネの・・・・あの娘も来年は15歳じゃな、今年がこの村で過ごす最後の
誕生日か・・不憫な」

そういうとふたりとも、黙って草の上に腰をおろした

この村の娘で、長女は15歳になるとメギドの王宮へ女官として連れて行かれるのが

しきたりとなっていた。

一度村を出て帰ってきたものは、体でもこわさないかぎりめったになかった

実質的な人質である。

ハルトとレネは幼なじみであった、ハルトの両親は放牧を家業とする農家で

レネは村で唯一の雑貨店兼居酒屋を経営する両親を持ち、５人兄弟の長女であった。

ふたりは家が近いこともあり幼い頃からよく遊んだ仲良しであった

老人は腰に下げた袋から、大きな木の実をとりだすと、ハルトに渡した

「食べるか？」

「うん・・」

そう言うとふたりは無言で木の実をかじり始めた

空には太陽が高くのぼり、季節を告げる渡り鳥が見える

遠くの空では、銀色に輝く飛行機械がすこしづつ遠ざかって行くのが見えた

おもむろにハルトが口を開いた

「おじいさん、どうしてこの地方だけ、こんなに悪くされるの？街のひとの暮らしとも
全然違うし・・」

ハルトは街にいった時、あまりの生活の違いに驚いていたのだ。
メギドを中心とするこの惑星の文化は、科学技術の進化もあって、
宇宙に人を送り空には飛行機械が
あふれ、生活のすべてが、自動化されるなど、目を見張るものがある
一方で、ハルト地方だけはひとの移動も制限され、最新の文化はおろか、機械を使うことも
許されない。
それは有史以来続いてきた習慣であり、憲法にも明記された「ＨＡＬＴ法」により
固定化された差別の構造である。
はじまりは何であったのか今は知るひとも少ないが、何十億という
この惑星の
わずか１万人にも満たない少数民族にすぎないハルトの事
声をあげても誰の耳にも届かないことは明かである
「恐れじゃよ・・」
老人がぽつりと言った
「恐れ？」

「奴らは恐れているのじゃ・・・・・」

「何を？」

「血じゃよ・・・ハルトの血筋を恐れているのじゃ」

―４―

「血筋って？」

ハルトは不思議そうに聞いた

「おっと、この話は１５歳にならなくてはな、・・」

ハルト地方では男子は１５歳になると元服するならわしであった

大人への仲間入りである

「ねえ、おじいさん、レネはどうして王宮に行かなければならないの？」

「それもまだ早い話だな・・昔からのしきたり・・ということだ・・・・まあ血筋を

太くしてもいけない、細すぎても奴らが困る・・・おっと言い過ぎたわい」

そういうとピオじいさんは、口にほをばった木の実を飛ばしながら高らかに笑った

「ちぇ！じいさんのいじわる」

そういうと

ハルトは腰につけた木製の剣を抜くと、起き上がりざま足下の草をなぎ払った

折からの南風にあおられ・・・・・・

いきおいよく舞い上がった草は、折からの南風にあおられて

高原の上方へと流されていく

それを見ていたピオじいさんは、にこりと微笑むと言った

「どうじゃ、ハルト、いっちょうやるか？」

そうして杖を、槍のように構えた

「くそ！今日は負けないからね」

ハルトも身構えて答えた

二人は、この高原で、剣術の練習をよくやっていた

ピオじいさんはさしづめ剣術の先生であり、ハルトはその弟子という風景である

ハルト地方の男達は、概して剣術にたけていたが、それは自営の範囲を超えるものではなく

大砲や銃、飛行機械や戦車全盛のこの時代に、たいして役にたつとは

思われなかったが、ハルト地方ではその差別法の為、銃及び爆発物、戦闘機械のたぐいは
全面禁止であった。
ピストルを所持しただけで、永久監獄行きであった
わずかに剣だけが、自治と自衛の為許されているのみであった
政府に対して反乱など望むべくもない、貧弱な武装である
二人ははげしく打ち合った
「ハルト！どうした？そんなもんか？・・・息が上がってるぞ」
「まだまだ・・」
ハルトの太刀筋は、子供のものでありながら、なかなかの出来だったが
木製の剣のことであり
１５歳になるまでは真剣を手にすることはできない
ハルトもそのことは解っていて、いつも真剣を手にしたいと夢見ていた
ふと、ハルトが剣術の手を止めた
「おじいさん・・あれを見て！」

見ると高原のはるか下のほうから白いけむりを上げながら
おおきな物体が近づいてくるのが見えた
「巡回じゃ！ハルト剣をしまえ！」
それは、王立国防軍所属の８輪装甲偵察車だった
ハルト地方の住人はつねに監視されているのだ
その偵察車両は、しだいに近づき、こちらへまっすぐに向かって来
た

―５―

装甲偵察車はぐんぐん近づいて来ると

ハルトたちの前まで来て止まった

白い排気が風にあおられてあたりを白く包んだ

その重厚な鉄のかたまりは前後に大きく揺れて止まった

ひとりの兵士、おそらくは車長と思われる人物が勢いよく飛び降りてきた

それと同時に、機関銃の銃身がかすかにうごくのが見えた

明らかにハルトたちをねらっている

「おまえら！何をやっている。居住地域以外での集会は反逆行為だぞ！」

「これは、これは隊長さんめっそうもない、集会なんてものではありません」

「お前ら、剣術の稽古をしていただろう？隠してもむだだ、望遠モニタで見ていたんだ

まさか、真剣の所持をしてはおるまいな！

見たところそのガキは１２歳くらいだろう・・剣を見せろ！」

明らかにいやがらせだった、兵士たちは退屈しのぎにおどしに来たとしか思えなかった

ハルトはしぶしぶ木製の剣を差し出した

隊長は剣を受け取るとにやりと笑った

「お前達ハルトはこの惑星の、やっかいものなんだ、さっさと絶滅するがいいさ！」

そう言うかと思うと、ハルトの大切な木製の剣をひざの上でへし折ってしまった

「何をするんだ、それはとうさんが作ってくれたんだ！」

そう言うと同時にハルトは兵士めがけて体当たりした

隊長は反動で、その場にあおむけに倒れてしまった

「ハルト、やめろ！」

ピオじいさんは、杖を横に構えて、ハルトの前に立ちふさがった

装甲車両からは、いつのまにか3人の兵士が銃を構えて飛び出てきた

装甲車の前面にある機関銃の銃身は今にも火をふきそうである

隊長は起きあがると、腰のホルスターから拳銃を抜いた

モーゼル・ミリタリー似たその大型拳銃は、明らかに軍用で、威力がありそうであった

拳銃の銃口がハルトたちを向くと同時に、ピオじいさんは杖をその場に落とすと

長いローブのようなその衣服のうしろがわに手をまわした

その動きは老人のものとは思えないすばやさであった

見ると、銀色に輝く剣がそこにあった

つかの部分には色とりどりの石が埋め込まれ、見るからに重厚な剣である

「おじいさん、やめて！」

ハルトはピオじいさんの腰に手をまわして叫んだ

「じいさん！死にたいようだな」

隊長はみるからに意地悪そうな顔をして言った

装甲車を降りてきた3人の兵士もじりじりと間合いを詰めて来ていた

ピオじいさんは眉間にしわを寄せて、恐ろしい形相で叫んだ

「撃つがいい！　だが次の瞬間、お前の体は二つになるだろう！」

間合いは明らかに互角だった、銃にとっても剣にとっても・・・

息がつまるような時間が流れた・・・

―6―

間合いは十分に詰まっていた

まさか隊長が撃つはずはないとハルトは思っていたが、ピオじいさんも隊長も

引く気配はない

息が詰まるような時間が流れた

空には渡り鳥の群れがさきほどより多くなっていた

遠くの野原ではハルトのやぎたちがゆっくりと草を食べているのが見える

隊長の引き金にかけた指がかすかに動くのが見えた

ハルトは

「あっ！」

と小さく叫んだ

次の瞬間、ピオじいさんのもつ剣のふちが虹色に輝いたように思えた

それは一瞬の事だった

剣が空を切る音と同時に銃声がした

ハルトは目を疑った
隊長の持つ軍用の大型拳銃の銃身が、まっぷたつに切断され、宙に舞った
あまりのことに、その場にいた者のすべてが何が起こったのか理解するのに
時間がかかったが、我に返った隊長が叫んだ
「な、何をしている、こいつらを撃ち殺せ！」
まわりにいた3人の兵士たちは
その銃口をハルトたちに向けて狙いを定めた
兵士たちは困惑していた
隊長の命令ではあったが、実際発砲するとなると、あとあと面倒なことになる
それは十分承知していたのだ
3人はお互い顔を見合わせ、困惑した表情である
ここ何年も発砲事件など起こっていなかったし
王制をひいているとはいえ、議会もあり、治安に関しては厳格な社会である

この血気盛んな隊長にあきらかに当惑している雰囲気であった
その場にいた誰もが、隊長の引き金の動きに殺意のあったのを感じていたのだ
隊長はしばらく興奮したおももちであったが
ふと何かを考えついたのか
にやりと笑って言った
「じいさん、大変なことをしてくれたな、たしかに凄腕なのはわかった
そこのガキがしたことも、まあいいとしても、このまま見過ごすわけにはいかん
大切な陛下よりいただいた拳銃を壊されたんだ
それに、おまえのその剣は金属を簡単に切り裂いた
お前の腕だけではあるまい
なにか秘密があるにちがいない、お前らの身元を確認の上、その剣を没収しお前を連行する」
ピオじいさんは、剣をさやに納めると静かに言った

「隊長さん、この剣はわが家に先祖代々つたわるものじゃ、秘密などない

拳銃を切断したのはまぐれじゃろう、

わしも、驚いている、ほんとじゃ」

ハルトの男にとって、剣は命のようなものだ、それを没収されるとは、

最大の屈辱である

「まあいい、それはいづれ、憲兵隊で申し開きするがいい、それともそのガキも

一緒に連行してほしいか？どうする？」

ピオじいさんは、しばらくハルトの顔を見つめていたが

剣をさやごと腰のベルトからはずすと

隊長に差し出した

「おじいさん！ぼくが悪いんだ、やめて」

ピオじいさんは満面の笑顔をつくって

「なあに、ハルト心配するな、この剣には秘密なんかありゃせん、悪いのはこいつらじゃ

すぐ帰ってくるさ」

「物わかりがいいな、じいさん、連行しろ！」

そう言うと兵士たちはピオじいさんをせき立てて、装甲車の後部搭乗口へ向かった

ひとりの兵士が、腰につけた何かの測定器をピオじいさんの右腕にある

青い入れ墨に当てると、一瞬白く輝いた

腕の入れ墨はハルトの民族を管理するための、情報コードになっていた

兵士はさらにハルトにも近づき、測定をした

「お前らは、これで逃げも隠れもできないんだ、バカなことを考えるな」

と意地悪そうに言った

ハルトは兵士の顔をにらみつけた

ピオじいさんは、後部ハッチをくぐる前に立ち止まって、隊長の方を向いて言った

「隊長さん、ひとつだけ聞いていいか？」

「何だ？」

「あんた、あの子を本気で撃つ気じゃったろう？」

隊長は不敵な笑みを浮かべながら

「ああ・・」

と短く答えた・・・・・

そのころ、遠く離れたメギドの王宮で

石造りの尖塔の小さな窓から

悲しげな顔をして

はるか遠くのハルトの方角を見つめるひとりの女官がいた

年の頃は４０前後

うらぶれた面持ちではあるが、美しい女性である

彼女の名は

グレーテ・ラル・ハルト

そう・・・ハルトの母親である

―7―

メギドの王宮は、中央都市メギドの中心にある小高い丘の上にある
平原しかないメギドにはめずらしいその岩山は
遙か昔の太古、カルデラの溶岩ドームであったとも
じつは古代の宇宙船の残骸ともいわれ
その上にそびえたつ、王宮ともあいまって荘厳な雰囲気をかもしだ
していた
王宮には１０００人の女官が勤めていたが
その大奥にあたる
聖域　と呼ばれるエリアには
代々ハルトの女たちが国王にかしづいていた
彼女たちの役割は国王の身の回りの世話であったが
もっと重要な役割として
世継ぎを産むという仕事があった
正式な皇后は他にいたのだが

この国のしきたりには、おかしな部分があって
世継ぎだけは、ハルトの女たちが担っていた
そう、この国の秘密として王族にハルトの血を混ぜるというのが
はるか古代からの伝統であった
その理由については
王族の秘密らしい
一般にはただの代理母よりも下級にみられているらしい
細菌を培養する培養シャーレのような存在だという人もある
ハルトの母はその適齢をはるかに過ぎていたが
ある理由から
王宮入りをすることになった

ハルトの母はハルト直系の血筋であったが為である
そうまでして
ハルトの血筋を欲するには

相当な秘密があるらしい

そのころレネは鏡に映った自分のすがたをみて涙をながしていた

王宮より届けられた女官の衣装合わせをしていた

「私、いきたくない」

涙はとめどなくながれ

新調された紺色の女官服のうえに一筋流れた

本来なら、レネも女性であるから

晴れ着を着てうれしいはずであったが

これから彼女を待っている運命を思うと

こみ上げてくる思いを

押さえることができなかった

そう

国王の世継ぎをうまなくてはならない

あるいは王子の子を・・・

―8―

ハルトの高原のすそのにある、憲兵隊の駐屯所では、いつもなら

おだやかな午後であるが

この日は一台の装甲車が巡回から帰ってきてというもの

急にあわただしい動きをみせていた

装甲車からは、ひとりの老人が連行されていた

そう、ピオである

「何？　剣で切断されただと？」

憲兵隊の司令である少佐は、巡回分隊の隊長から報告を受けると

その切断された軍用拳銃とピオの剣を、交互に見つめていた

その長い髪は明らかにこの少佐が女性である証拠である

豊かな金髪の髪が腰まで伸び、制服の肩に付けられた金モールと

見まごうばかりの美しい髪である

「物理的に、不可能だ、そんなことがあるものか」

少佐は、少し口元に笑みをうかべながら言った

「しかし、少佐、私はたしかに見たんです、あいつが剣を抜いた瞬間
剣が虹色に輝くのを」

「おそらく、太陽の光が反射でもしたのだろう、いいかこの事は他言するな
分隊の兵士にも徹底させろ、いいな」

分隊長はすこし納得がいかない様子であったが、胸をはって少佐の方を向き直ると

敬礼をして答えた

「わかりました、機密といたします、あの老人はいかがいたしましょうか？」

「あとで、私が直接尋問する、拘置しておけ、くれぐれも乱暴するな！」

「はっ！」

分隊長は短く答えると、足早に天幕のそとへ駆けだしていった

少佐はひとり残ると、拳銃と剣をかかえたまま

木製の簡易ベッドに座った

その金色の長い髪をしきりにかきあげながら、何事か考えている様子だった

考え事をする時そうするのが、少佐のくせであるようだった

脇におかれた無線機や、書類のたばにまじって、綺麗な額縁に納められた

肖像画が置いてある

それは、この国いやこの惑星の支配者である国王

「ウル・メギド18世」

の肖像画であった

豪華な王族の衣装を身にまとったその姿は

権力者の圧倒的な威厳をそなえているように思われた

その長く伸びた髪は、少佐と同じ金髪であった

どことなく、少佐の人相と似通っているように思われた

少佐はかすかにふくらみのわかる、胸の内ポケットから

シガレトケースを取り出すと

タバコに火をつけた

「まさかな、しかしもしもということもある、御報告でねば」

そうひとりごとをつぶやくと

手に持ったタバコを口にくわえると

ピオの重厚な剣を、そのさやから抜きはなった

小気味よい金属音をたてながら、抜き放たれた剣は

午後の天幕のなかのやわい光のなかでも、水滴がはじけたのかと

見まごうくらいの輝きをはなっていた

「たしかに、いい剣だ」

「しかし、とくに変わったところはないな」

少佐は剣をふりまわしてみたり、細部にわたり入念にしらべてみた

そして刃の部分を見ていたとき

一瞬顔色がかわって

口にしていたタバコを落とした

あきらかに動揺していた

何かに気が付いたのだ

「ばかな！こいつは　全然刃こぼれしてないじゃないか！」

少佐は剣を左手に持ったまま

かたわらにある電話に手をのばした

朱色に塗られたその電話は、部隊間の連絡用の無線機とは

あきらかに用途が異なっていた

そう

メギドの王宮への直通電話である

「そうだ、憲兵隊司令だ、内務卿を出してくれ、火急の用件だ、今すぐに・・・」

―9―

ハルトは呆然と立ちつくしていた

さっきまで、ざわめいていた高原の雰囲気は

うそのように、静まりかえっていた

高原のむこうでは、ハルトの家畜たちが、なにごともなかったように

草をたべている

晴れ上がった空には、あいかわらず季節を告げる渡り鳥と

居留地を監視する飛行機械がゆるやかに飛んでいる

根元から折れた木製の剣と、銃身を切り取られた軍用拳銃の先端が

ハルトの足下にころがっている

ハルトはまるで夢でも見ているような気分であったが

すぐに現実に引き戻された

「たいへんなことになった!、おじいさんどうしよう」

自分の軽率な行動が招いた結果ではあったが

まだ少年にすぎないハルトにとっては

どうすることもできない現実であった

無性に腹が立ったが、忌み嫌われた民の子にとって、何もできないことが

いたいほどわかっていた

急に目頭が熱くなり、なみだが止めどなく流れた

その時、ふいに

ハルトの居たあたりの草が大きく波打ったかと思うと

円心状にひろがりはじめた

草陰にかくれていた、野鳥が数羽　けたたましい鳴き声をあげて

飛び立った

感情にわれを忘れていたハルトは

最初きがつかなかったが、見ると

さきほどまで、はるか上空をゆったりと飛行していた飛行機械が

ハルトの頭上までせまっていた

すさまじい爆音があとからやって来た

間近で見るその飛行機械は

ずんぐりとした龍のように思われた

コクピットと思われる半透明の部分から　飛行士が体を乗り出して

片手で何かの手振りをしている

どうやらハルトにたいして、脇へよけろということらしかった

ハルトはわけがわからなかったが

先ほどの一件もあり、足下の折れた木製の剣をひろうと

草むらのなかで、身をひそめた

飛行機械は高速で回転するローターを、垂直にしたかと思うと

いっきに地上へと着陸した

ローターの回転はしだいにおそくなり

やがて止まった

コクピットから、飛行帽に飛行服すがたの兵士がいきおいよく飛び降りてきた

ハルトは一瞬逃げようと思ったが

さきほどの一件が脳裏によみがえり

半ば自暴自棄になっていたのか、折れた木剣を体の中央に構えると

草むらから、飛行士に向かって近づいていった

それを見ていた飛行士が口を開いた

「少年、勘違いしないで、別に君をどうこうしようというわけじゃないの」

その声は高原のそよ風にも似た、涼やかな声だった

女性兵士だった

ハルトはあいかわらず今にも突進しそうな表情だったが

兵士はかまわず続けた

「さきほどの一件、上空から見ていたわ、あの偵察分隊の隊長、最低ね

悪いのは彼らよ、あなた方は悪くない、あのおじいさんはお気の毒に」

ハルトは少し、面食らっていた、今まで接してきた兵士のイメージとは

あきらかに違っていた

ハルトの民に対して敵意がないように思われたが

それもうわべだけのことかもしれないと警戒していた

「あなたが、我々を恐れるのも無理もないわね、何千年も虐げられてきたんですものね

同情するわ、でも信じて欲しい、少なくとも私は敵ではないわ・・・」

そこまで言うと、突然ハルトが声をあらげてさえぎった

「恐れてなんかいない！　憎しみだけだ！」

それを聞いた兵士は、にっこりと微笑んだ

「いいわね！その調子、少年！あなたガッツがあるわ、さっきのタックルもよかったわよ

ハルトの民はその昔誇り高い剣士の一族だったけど、最近は牙を抜かれた猛獣のようだった

あなたや、あのおじいさんを見てやはり、伝説の民だと思ったわ」

「ところで・・・」

そういうと兵士は急に、低い声になって、射るような視線をハルトに向けた

「あのおじいさん、ただものではないわね、上空から見ていて、何かが光っていたでしょう

もしやと思って、降りてきたの」

兵士は、足下に転がっている軍用拳銃の切断された銃身をひろいあげた

「これね、君はこれについて何を知っているの？教えてくれない？」

ハルトは反射的に、答えてはいけないと思った

木製の剣を構えて言った

「し、しらない！」

兵士は困惑したような表情を、みせて

「まあ、いいわ、今はあなたも動揺しているようだし、また会いましょう、いつも上空に居るから

もう任務にもどらなきゃ怪しまれるわね、これもらっていくわよ」

そういうと、切断された銃身を飛行服のポケットに入れた

「言い忘れたわ、私は　王立飛行軍、居留地警備隊　メルダース中尉・・あなたは？」

兵士のにこやかな笑顔に、反射的にハルトは答えてしまった

「ハ、ハルト」

「へえ～、ハルトのハルトのハルトかあ、直系ってわけね、これは面白くなりそうだわ

それから、言っておくけど、私はあなたの敵ではない、むしろ味方ね、それだけは

信じていいわ、まだ理解できないかもしれないけど、王国も一枚岩ではないということ

それだけは、おぼえておいて・・それじゃ」

そう言うと兵士は飛行機械の方へ足早にかけていった

ハルトはとっさに叫んだ

「教えて、おじいさんはどうなる？」

「大丈夫よ、すぐもどってくるでしょう、あの司令のことはよく知ってるから分かるの、

でも言っておいてやつらは何かを探しはじめるでしょうと」

そういうとコクピットに乗り込み

半透明のキャノピーを閉めた

ローターが唸り声をあげてゆっくりと、回り始めた・・・・

―10―

「それは、確かか？」

受話器の向こうの宰相はいぶかしげに尋ねた

「はい、まちがいありません、金属を切断するなど、普通の剣ではありえません」

強行偵察分隊の隊長より受け取った

ピオの剣を抜き放ちながら

憲兵隊司令は、さきほどの一件の一部始終を伝えた

「まあ、何かの間違いということもある、我々が何世紀にもわたって捜索してきたにも

かかわらず、見つからない物が今出てきたなど

にわかには信じられないが・・・」

宰相はあきらかに、自分の代になってそのような物が出てきたことに

いらだっていた

「例年の武器検査では、そのものは帯剣しておったのだろう？

検査機械に異常な反応は

一件も報告されていないはずだが・・・もしかすると」

憲兵隊長は言葉をさえぎった

「この剣を構成している金属単体では、反応しないのでは？」

「うむ、わしもそれを考えておった、古い伝承ではそのような記述もあったような気がする」

「そのピオとかいう老人は、イレズミをしておったのだろう？」

「はい、バーコードのデータによれば、元鍛冶屋ですが、今は弟子に交代して隠居の身です」

「一見して、拘束歴もなく、おとなしいハルト族のように見えますが・・・」

「とにかく、そのものを徹底的に調べるのだ、死んでも口を割らせるのだ」

「そのことについて、私に考えがあるのですが・・・」

憲兵隊長は意味ありげに言った

「どのような、考えじゃ？」

「おそらく、誇り高いハルト族のこと、どのように激しい拷問も意味のないことかと思われます

むしろ釈放して泳がせたほうが得策かと思われますが・・」

「そうか、お前が言うことだ間違いはあるまい、何世紀にもわたって捜索しつくされたハルト高原

のどこかに、我々が想像もしない場所がまだあるということか、そこに禁断の　隕鉄剣が隠されて

いるということか・・隕鉄剣・・・おおなんと忌まわしい響きであろう」

「国王への報告はいかがいたします？」

「うむ、そのことじゃが、陛下は王子の世継ぎの件で、心労がかさなっておられる

はっきりとした確信が持てる情報がない今、早すぎるじゃろう

このことは、ワシとお前の内密ということで・・・」

「分かりました、お任せください」

「頼むぞ」

憲兵隊長は赤い受話器を置くと

ピオの重厚な剣をさやに収めようとした

一瞬剣のふちが光ったように思えたが、たいして気にもせず

さやに収めると

天幕を出て、ピオの拘留されている場所へと向かった

―11―

憲兵隊の司令はわざといらだってみせた

「お前が持っていたこの剣は、ただの刀剣ではあるまい、鋼鉄の銃身がどうして切断できるというのだ

いいかげんに白状しろ」

ピオじいさんは少し狼狽して見えたが、それが演技であるのか

偽りのない姿であるのかは分からなかった、後ろ手にされた両腕には

鈍くひかる手錠が、年老いたしかしたくましいその手首に食い込んで

かすかに血がにじんでいた

もう何時間こうしているだろうか

陽ははすでに暮れ、罪人や規則に違反したハルト族を拘留するための

コンクリートでつくられたその重厚な拘置所は

めったに使われることもなく

よほどの重罪犯でもないかぎりここで尋問されることなど希であった

壁にかかった拷問の道具も、ほとんどは錆び付いていて

今では

罪人を精神的に畏怖させるぐらいにしか　用をなさないように思われた

しかし、その重厚なデザインとサビついた色彩は

そのまま

ハルト族の迫害の歴史の古さを物語っているように思えた

それまで、司令の尋問を聞いていたピオじいさんは

ふいに何かを思いついたように口を開いた

「何度言いますが、その剣は代々わが家に伝わるもので、例年の武器検査も通過してきたものです

なんら不思議なところはありません。

私は元鍛冶屋ですから金属のことはよく知って居るつもりですが、失礼ですが

あの拳銃の鋼鉄の鍛錬の過程で、なんらかの不純物がまじり、

硬性に問題があったとしか思えません

金属を扱うものとして言わせてもらえれば・・・・」

そこまで言うと、司令がピオのその言葉を待っていたかのように

ピオの次の言葉をさえぎって言った

「不良品だったということか？」

そう言うとピオの落ちくぼんだ目をのぞき見るように見つめた

一瞬二人はお互いの瞳をみつめて

何かを探り合うような緊張が感じられたようだが

ピオは静かに答えた

「おそらく・・・・」

次の瞬間、司令はその甲高い声で笑い始めた

「ククク・・そうか・・・ハハハハ」

「国王よりの大切な武器を、不良品呼ばわりとは許せんが、ま

あお前の言うことにも

一理ある・・・たしかにはずかしい話だが、この宇宙に植民地を持つほどの

わが王国の科学技術を持ってしても、例年作動不良を起こす武器は少ないとは

お世辞にも言えない、もっともこれは製造技術に問題があるのではなく

原料の鉱石に問題があるのだがね・・・」

そう言うと司令は、側に立っている衛兵に何かを話し始めた

ピオには何を言っているのか聞き取れなかったが

あきらかに今後のピオの処遇について話しているように思われた

ひととおり話すと

司令はピオの方を向き直って言った

「お前の処分については私に一任されている、今回の件は不問とし、釈放する

少年に銃を向けたのは、私も感心せんからな

人的被害もなかったのだから、正当防衛ということでいいだろう

しかし、国王の武器を破壊したのはきわめて遺憾であるから

お前のこの剣は没収とする・・・・いいな？　わかったら帰れ！」

ピオじいさんは、何度もおじぎをして答えた

衛兵がピオの手錠をはずし

出口へとせきたてていった

その様子を司令は無言でみつめていたが

ピオが拘置所のとびらを出る間際に後ろから呼び止めた

ピオはおもむろに振り返った

「ピオ、鍛冶屋としてのお前に意見を聞きたい、良質な金属を錬成するのに

何が一番いいのか・・・たとえば

伝説の　隕鉄　とか？」

一瞬ピオのまなざしがするどく光ったように思われたが

すぐに、やさしい老人の目つきに変わり答えた

「　隕鉄？　ははは・・・あんなものはただの伝説でしょうな

わしもお目にかかりたいものです」

そう言うと衛兵とともに、暗くなった扉のむこうへ消えていった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3824c/

ＨＡＬＴ

2010年12月18日20時47分発行